

令和元年6月25日

智頭町議会議長 谷口 雅人 様

民生常任委員長 河村 仁志

委員派遣報告書

本委員会の調査事件について、下記のとおり委員を派遣したので、智頭町議会会議規則第77条の規定により報告します。

記

1. 期 日

令和元年6月18日（火）～19日（水） 2日間

2. 場 所

- (1) 石川県河北郡内灘町字湖西274-2「株式会社 河北潟ゆうきの里」
- (2) 石川県白山市三宮町ホ1番地 「石川県林業試験場」

3. 目 的

- (1) 循環型農業の推進と担い手育成、堆肥づくりと活用について
- (2) IOTを活用した石川県でのスマート林業構築の取組について

4. 派遣委員

全委員5名

安道泰治議員、岸本眞一郎議員、大河原昭洋議員、大藤克紀議員、河村仁志議員

5. 所 管 等

(1) 株式会社 河北潟ゆうきの里

近年、本町内で若い年代の酪農家が増える傾向にあると共に飼育農家全体の飼育頭数も増える中で、牛のふん尿も当然増え、その処理に困難が生じているという問題の解決策として、取り組みを視察した。

河北酪農組合が施設を保有し、委託契約に基づき、河北潟ゆうきの里が施設の運営と、家畜ふん尿堆肥の生産から販売、利用促進までを担っている。

現在、13農家で構成する酪農団地から発生する家畜ふん尿と、近隣自治体の下水汚泥を引き受け、ふたつを混ぜることにより安定した堆肥づくりを行っており、30年度の実績では、ふん尿と下水汚泥合わせて約3万2,60

0トンを受け入れ堆肥化し、約9,970トンの堆肥を販売している。

生産される堆肥は、高温発酵させて嫌な臭いを無くし、有害な大腸菌や雑草種子などを死滅させたもので、安全性も環境への配慮も高い商品になっている。

また、生産された堆肥のうち、8割は酪農家の自給飼料生産のために再配分され、残りの2割が県内農家に販売されている。

河北潟ゆうきの里のように、有機資源を循環させながら農産物を生産する運営システムは、本町の農業が健全に維持され発展していくための、持続性の高い理想的な農業体系であると言える。

今後、畜産農家を含めた農業者の高齢化、担い手不足の状況が継続することが予想される中、堆肥利用促進のためには、耕種農家の理解や経費と人員の問題など、更なる検討が必要と思われるが、畜産経営の新たな取り組みのヒントとなる、また地元産業廃棄物処理業者との連携も考えられる価値ある視察となった。

(2) 石川県林業試験場

山村の過疎化、高齢化による境界の不明確化の進行、木材価格の低迷による採算性の悪化などを背景に、石川県では平成26年2月に、県・建設作業機械最大手のコマツ・県森林組合連合会の3者で林業に関する包括協定を締結し、スマート林業（IoTを活用した省力型林業）の構築に向けた取り組みを実施している。

今回、ドローンの試験飛行も行っていただき、離陸してから目的地まで移動し、写真撮影後、着陸するまでの様子を見学したが、従来は人力でしかできなかった森林資源調査が、高精度でかつ短時間でできるようになり、作業の大幅な省力化、効率化に繋がっていた。

現在は、操縦技術者の育成と現地実証を行うことによりノウハウの蓄積を図り、運用体制の確立に繋がっていきたいとのことで、まだまだ課題もあるように思われるが、本町においても、基幹産業である林業の活性化につながるよう、役場・森林組合と連携し、ドローンの導入・活用、スマート林業の構築を積極的に進めていくべきだと感じた。